

「第29回全国高等学校文芸コンクール」(公益社団法人全国高等学校文化連盟、読売新聞社主催、文化庁ほか後援、公益財団法人一ツ橋文芸教育振興会協賛)で県内から入賞、入

選した4人のうち、俳句部門で優良賞に選ばれた私立名古屋高3年安藤翔さんと、入選した同高2年長谷川凜太郎さんに喜びの声を聞いた(他の2人は24日に掲載)。

入賞、入選(俳句部門) 2人喜び語る

秋蟬の翠の残る骸かな

名古屋高3年 安藤翔さん

共感呼ぶ句が理想

「最初は全く実感が湧かなかった。優良賞が取れるなんて」と笑顔を見せた。「日常の中で見えた光景を詠むようにしている」と、自らの俳句について解説する。理想の句は「一瞬の情景を細やかに切り取り、共感を呼ぶことができた」という。作品を見聞きした人の頭に浮かぶような描写を大切にしている。

受賞作は、学校の駐車場近くを歩いていた時、自分の前で蟬が木から飛び立ったが、地面に落ち、最期の時を迎えた一瞬を詠んだ。「少し理想に近づけた句だった」と振り返る。今は受験勉強で忙しいが、そんな中でも目の前の風景を詠みたくなることもあるという。「職業病みた

「深み足りず」
入選に悔しき

「来年はもっと名前が上の方に載るようにしたい」と、少し唇をかみ締め、悔

涼しさや夜空に飛行機の尾灯

名古屋高2年 長谷川凜太郎さん

しさをじませた。

最初は小説を書きたくて部活動の同校文学部に入っただが、17文字で表現する俳句の魅力に出会い、のめり込んだ。「心の底から一生懸命になれるものを見つけた」と話す。



優良賞を受賞した安藤さん(左)と入選の長谷川さん

夏ももう終わりがけのある夜、公民館の自習室から気分転換に外に出た時、夜空を見上げて深呼吸をした。ふと目に飛び込んできた飛行機の無機質なライト。そこに何か涼しさを感じ、句が浮かんだという。ただ、今回の入選には喜びを見せず、「僕はまだまだ作品に深みが足りない。自分が切り取って詠んだ情景が相手の心にも浮かび上がるような句を作りたい」と、さらなる高みを目指している。

同校文学部顧問の水野大雅教諭は「安藤君と長谷川君は普段から互いに句を批評し合って成長してきた。2人の受賞はほかの部員たちにもいい刺激になる」と喜んでいる。